

福岡市PTA協議会 いじめ防止委員会 勉強会の報告

いじめ防止委員会 委員長 茂島信一

いじめ防止委員会では、平成21年12月16日(水)に、メンバーの一員でもある日佐中学校校長 真鍋 和弘 先生を講師に、「いじめの現状と大人の役割」というテーマで勉強会を行いました。その要点を報告いたします。



ここ数年、学校現場からのいじめの報告は減少している。だが本当にいじめはなくなってきているのだろうか？

気がかりな変化が、見受けられる。些細なことでも「いじめられた」と訴える子が増えてきた。また最近では、いじめていた子どもがいじめにあったり、いじめられていた子がいじめの側にまわったりと、「加害者」と「被害者」が簡単に入れ替わるケースも目立つようになった。つまり、誰もが、いつ、いじめにあってもおかしくない時代。だから子どもたちは、不安になる。

こうしたいじめをなくすためには、構造を変えなければならない。いじめ集団の構造は、[被害者・加害者・仲裁者・観衆・傍観者]からなる。いじめを助長させているのは、実は、周りではやしたてたり、喜んで見ていたりする「観衆」と、見て見ぬふりをしている「傍観者」。この構造を変え、全員で、いじめを許さない雰囲気を作り上げることが重要だ。

この「全員」には、保護者も、教職員も、含まれる。「私の子どもは関係ない」「自分のクラスは関係ない」ということはない。PTAと学校が連携し、研修会などを行いながら共通理解を図り、「いじめは許さない」という姿勢を示すこと。生命を大切にする教育を行うこと。さらには地域の関係機関等とも連携し、協議する場を設け、地域ぐるみの対策を推進することも必要だろう。

特に、家庭の役割が重要である。いじめのサインを見逃してはいけない。いじめも早期発見が重要であり、学校より家庭のほうがより早くサインに気づけるはず。そして「おかしいな」と思ったら、一人で悩まず、すぐに学校へ相談すべき。学校に早期に相談できたいじめ問題は、約八割が解決しているというデータもある。

また、我が子がいじめの側にいる場合もある。行動に裏表がないか、自己中心的な言動が目立たないか、また、クラスにいじめが発生した場合、我が子はどうふるまうのか、どうふるまうべきなのか、家庭で話し合う機会を設けることが肝要である。

では、もし子どもが友達とトラブルを起こした時、巻き込まれた時、保護者はどうすればよいのだろうか。まずは、しっかり話を聞くこと。そして子ども自身が解決できるようであれば、見守ることが重要だ。保護者がすぐに出ていき解決してしまうと、子どもはそのトラブルから何も学ぶことができない。だからまた、トラブルが起きる。まずは子どもが自ら解決できるよう、支えることが大事ではないか。



教育現場を預かる真鍋校長先生のお話は大変説得力があり、参加した委員一同、一人の親として非常に考えさせられる内容でした。今回改めてわかったのは、いじめは、人ごとではないということ、誰にでも起こりうる問題であり、だからこそ、全員で変えていかなければならないのだということです。今後の活動に活かしていければと思いますし、子どもを持つすべての皆様と一緒に、この問題について考えていければと願っています。

(平成22年1月23日)